

### Profile — 吉田俊郎

1950年、慶應義塾大学文学部哲学科心理学専攻卒業。文学博士（慶應義塾大学）。同大学で助手、助教授、教授を歴任。1990年に定年退職後、1999年まで常盤大学人間科学部教授。専門は知覚心理学、認知心理学、実験心理学。主な著書は『基礎心理学』（単著、北樹出版）、『感覚・知覚心理学ハンドブック』（分担執筆、誠信書房）など。

かねてから研究を重ねてきた場の「ゆがみ」に対する見えの「ひずみ」の実験的測定から、図形残効の生起機序を明らかにする方法を模索していました。このような研究は1950年以降、多くの先覚者によってなされ、理論的、実験的な研究成果が報告されています。

私は正弦波縞を用い、視覚の空間周波数特性から二次元的、あるいは三次元的空間に広がる図形の視覚的変位を実験的に明らかにする目的で研究を進めていました。しかし、装置の取り扱いに不明な点があり、また、種々発表された新しい実験手続きについて、その摘要にいくつかの疑問点がありました。そこで、1978年9月から翌年4月まで、大学のサバティカルを利用して、英国のケンブリッジ大学を訪れ、当時その代表的な研究者であるDr. C. ブレイクモアに教えを請い、「空間周波数特性の波及効果（eccentricity）」について、直接、実験を通して、それらの問題点を解決しようとしてきました。

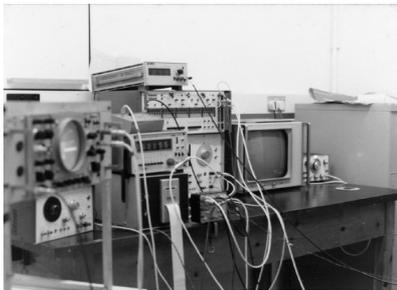
## イギリス漫遊記

慶應義塾大学名誉教授

### 吉田俊郎（よしだ としろう）

Dr. ブレイクモアは快くその願いを聞き入れ、実験心理学の教授Dr. O. L. ツァングウイルは私を訪問教授として受け入れ、ケネス・マーシャル研究棟（感覚生理・心理学の研究室、ヘッドはDr. W. F. キャンベルでした）の1階の一部屋を私の実験室として提供してくださいました。そこで、Dr. ブレイクモアが使用していた実験装置（写真）をその部屋にセットし、彼の指導のもとで、彼と共に実験を進め、多大な示唆を得ることができました。たまたま、私が必要としていた装置の一部をDr. O. ブラディックの婦人であるDr. J. アトキンソンが「空間周波数を用いた新生児の視力測定」の研究に使用中だったので、その間に、実験に入る準備や、実験計画などを立てることにしました。

しばしば、イギリス人は冷たいという評価を耳にすることがありますが、願ひすれば、とことんまで面倒をみってくれる暖かい性格であることを、身をもって実感しました。頼めば研究室を貸してでも最後まで面倒をみるが、頼まれなかったら、それは自分できるといふことだから口出しはしない



自室にセットされた実験装置

という、自立性を尊重する国民性があるのだと感じました。

その一例を挙げます。私は、英国の研究者たちも、日本流にクリスマスから正月5日くらいまでは研究室を休むであろうと思って、年末年始にかけてドイツに住む知人を訪ねる計画を立てていました。そこで、確認の意味で2、3名のポスドクの人に、新年はいつ頃から実験を始めるかを聞いたところ、2日にはそれぞれ自分の仕事に戻ってくるということでした。私は計画を変更し、3日にドイツより帰りました。正月の3日に研究室に顔を出してみますと、「暮れの30日に全ての装置が揃ったので、30、31日にかけセッティングをしたから、実験はいつでも開始できます。私はスイスのローザンヌで仕事があるから、5日には帰るので、それまでにデータを取り始めてください」という彼からの置き手紙が残されていました。これを見て、年の暮れの最後まで、私のために2日間も時間を潰し、その直後にスイスに飛んで自分の仕事をするなど、自分の過密な時間を割いてまで人に尽くすその人柄に感激し、自分の考えの甘さをしみじみと感じました。彼はたいへん精力的に仕事をし、多くの研究論文を発表し、その業績によって1978年の“Man of the year”に選ばれています。彼と共に実験が行えたことを心から感謝しています。いろいろと学ぶところの多い留学でした。